

障害者福祉論④

<今日の授業のねらい>

「『障害』とはなにか」をあらためて問い直し、その問題の本質を確認することが、今日の授業のねらいです。

「障害」に伴う問題は、個人的な問題なのか、それとも極めて社会的な問題なのかを問い直します。

【はじめに】

「障害」とは何だろうか。いま、あらためて皆さんと一緒に、その原点を問い直してみたい。それは個人的な問題だろうか。それとも、すべての人にかかわる社会的な問題なのだろうか。

さまざまなメディアを通じて、「障害」あるいは「障害者」、ないし「障害のある人」という言葉を目にするだろう。近年では「障害」に代わって「障碍・障がい・しょうがい」などの異なる表記が使われることも増える傾向にある。それはなぜなのだろうか。

読者の中にはこうした違いを意識する人も、気にしたことない人もいるだろう。「障害」という表記を避ける立場の人によれば、この表記は、「差し障る」「害がある」というネガティブな意味の漢字の組み合わせによって「障害」に負のイメージを与え、対象者にスティグマ(stigma: 恥辱、汚名)を与える、というのが主たる理由とされることが多いようだ。

しかし、筆者の知るある障害当事者は、このように語ってくれた。

「障害者の呼び方、表記の仕方なんか、本当は正直、障害当事者にとっては別にどうだっていいことなんだよ。確かに、『精神薄弱者』が『知的障害者』に、『痴呆症』が『認知症』に、そして『精神分裂病』が『統合失調症』に、という具合に呼び方や診断名称が変わったけど、それで社会の何が変わったの？ 障害者である僕らが望んでいることは、呼び方や表記の仕方に気を使う暇があるなら、障害のある僕らにとって迷惑で生きづらさをもたらしている＜社会の中の障害＞という切実で現実的な問題を、なんとかしてほしいだけなんだよ」

障害当事者から投げかけられたこの言葉の意味を、真正面から受けとめることから始めたい。

本章では、障害福祉学を学ぶにあたって、まず基礎となる「障害」の概念と、それと深くかかわる障害者福祉理念の歴史的展開を確認する。それを通じて、「障害」とは昔から変わらない概念ではなく、さまざまな当事者の申し立てや社会の認識の変化を通じて陶冶(とうや)されてきたものであることがわかるだろう。

アンコンシャス・バイアスに規定された言動

先ほどの例は、ケガをしたKに対する配慮よりも、自らの仕事に感心が向かってしまった言動です。結果として、Kに対する気配りに欠けた対応になってしまいました。

私たちは相手に良かれと思って発した言動が裏目に出てしまうことがあります。その要因の一つが「アンコンシャス・バイアス」(無意識の思い込み、無意識の偏見)です。

私たちは今まで生きてきた経験や受けた教育などから、さまざまなアンコンシャス・バイアスを持っています。

ところで、このアンコンシャス・バイアスを完全に払拭し、初期化することは容易なことではありません。まずは、無意識のうちにあるものを意識化すること、そしてその意識化したものが相手にどのような影響を与えているのかを自覚することから始めることです。

自らのなかでいつの間にか「当たり前」になっている価値基準を今一度問い直してみませんか？

【演習課題2】

あなたは、毎年8月の終わりに放映されている日本テレビ系チャリティ番組「24時間テレビ」について、どんな感想をもっていますか？ 感想を箇条書きで挙げてください。

＜別刷り配布の参考資料＞

- 毎日新聞 オピニオン「『感動』に流されず多面的に伝えて」、2016.9.26
- 毎日新聞 オピニオン「メディアと障害者像」、2016.10.7
- 毎日新聞 オピニオン「『貧困』女子高生バッシング」、2016.9.20
- 毎日新聞 オピニオン「オネエ呼ばわり 性的少数者『不快』」
2016.5.16
- 毎日新聞 くらしナビ ライフスタイル「相模原障害者殺傷事件
考える市民講座」同じく生きる姿感じて、2017.5.27
- 朝日新聞 オピニオン&フォーラム「弱者への批判と同じ構造」
2018.9.19

障害を考える本質的な問い

映画『 Music Within 』の会話から

「障害をもつアメリカ人法(ADA)の制定に影響を与えた
Richard Pimentel の実話を基にした映画」

A:「私たち障害者は就職で差別を受けている。雇用主や社会の偏見のためだ。だから、社会の人々の障害者に対する考え方や偏見を変えなくてははいけないんだ。」

B:「いや、そうだろうか。社会の人々が変えなくちゃいけないのは、自分自身に対する考え方なんじゃないか。」

障害を考えることは、障害者のことを考えることと同義ではない。人間はこうあらねばならない、人間とは何か(人間像)という、自分自身の間人という存在についての価値判断基準そのものを考えることと同義ではないか、と、この映画の短い会話は問うていると私は思いました。

出所:久野研二編著『社会の障害をみつけよう—一人ひとりが主役の障害平等研修』(株)現代書館,2018,pp26-27

障害平等研修と従来の研修との違い

☆焦点の当て方の違い

従来の研修 = 障害者は何ができないか ⇒
何に困っているのか
障害平等研修 = なぜ障害者は差別され ⇒
ているか

☆疑似体験は以下に焦点を当てる

個人の心身の機能的側面(社会的側面ではなく)

障害者個人ができないこと(できること ・ 可能性ではなく)

「何が」障壁か(「なぜ」障壁がつけられたかではなく)

出所:久野研二編著『社会の障害をみつけよう—一人ひとりが主役の障害平等研修』(株)現代書館,2018,p29

障害平等研修とは

- 身心の機能障害ではなく、社会の障壁・差別に焦点をあてる。
- 単なる態度の転換ではなく、偏った障害理解を改める。
- 障害の個人モデルではなく社会モデルの理解を促進する。
- 障害の解決を超え様々な多様性に基づく共生社会づくりを指向する。
- 機能障害の疑似体験ではなく障害についての議論を中心にする。
- 障害者がファシリテーターを務める。

表1 障害の個人モデルと社会モデル(出所:前掲書p55)

論点	障害の個人モデル	障害の社会モデル
人	人は“正常”であるべき(人は“正常”と“異常”に二分できる)	人は多様である (人は“正常”と“異常”とに二分できない)
障害とは	個人に起こった悲劇 障害者個人の問題	社会にある差別や不平等 社会の問題
価値	均質・同質性	多様性と平等
目標	正常への回復・社会復帰	(多様な人の)参加の実現
核	機能回復	人権
分析の視点	障害者のどこが問題なのか(変わるべきは障害者)	社会のどこが問題なのか(変わるべきは社会)
戦略	統合・同化(障害者が社会に 適応する)	社会開発(多様性を基準にした共生 社会の形成)
障害者	治療の対象	変革の主体
社会	物理的環境	構造と制度、人々の関係、価値や文化

表2 障害平等研修が大事にしている行動(出所:前掲書p74)

大事にしている行動	批判的にとらえている行動
<ul style="list-style-type: none"> ●社会や環境が変わる行動 ●社会の問題としての解決 ●障害者の声を訊く ●力の獲得と社会・環境可能性の拡大 ●インクルーシブな解決行動 ●原因の解決 ●問題解決型思考 ●行動の主体になる 	<ul style="list-style-type: none"> ●障害者が変わることが前提条件の行動 ●障害者個人の問題としての解決 ●専門家だけで決める ●“社会復帰”的な考え方 ●分離型の解決 ●反応 ●前提条件指向 ●他力本願／責任転嫁

【次回授業までの課題】

テキスト：結城俊哉編『共に生きるための障害福祉学入門』大月書店，2018,pp12-25 を読んでおくこと

基礎編

第1章 障害福祉学の基本となるもの

－障害概念と障害者福祉理念の歴史的展開

はじめに

1. 「障害」とは何か

2. 障害者福祉理念の歴史的展開

－「国際障害者年」以前と、「障害者の権利条約」のある現在